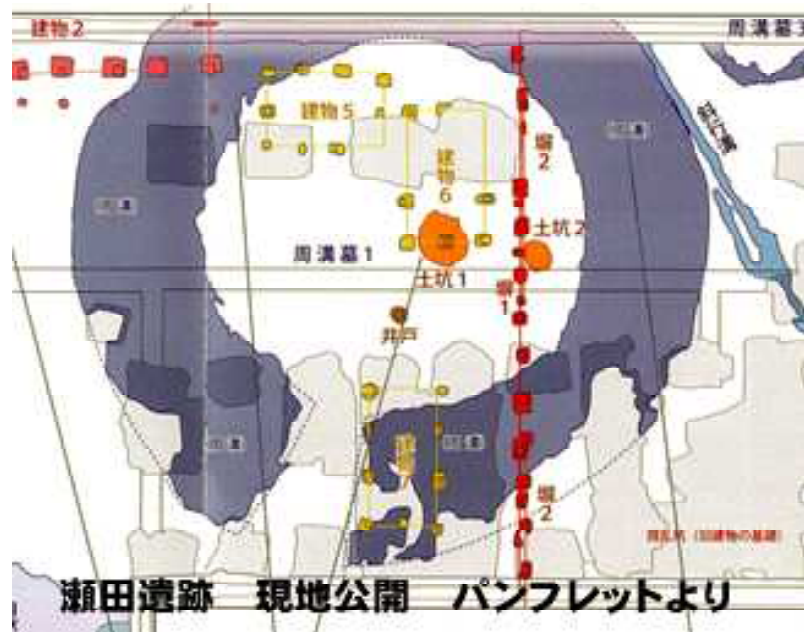


## いのちと思想② 古墳時代にさかのぼる円の意味

前号においては満月を例に歴史文化にまつわる円の意味を述べましたが、今回はさらに古墳時代にさかのぼります。

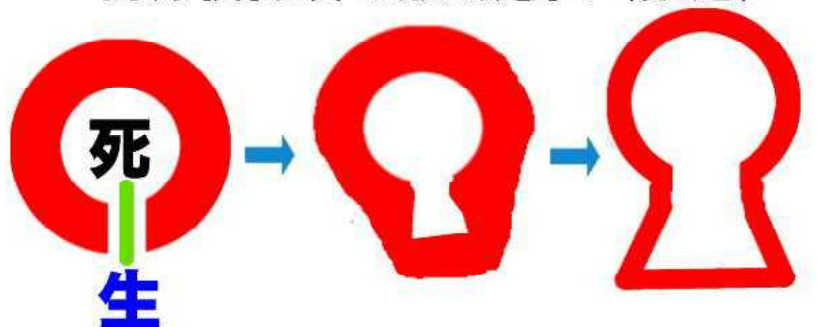
時は平成28年5月、飛鳥地方で国内最大級の円形周溝墓が瀬田遺跡で発見されました。これは、弥生時代の墳墓から古墳時代の前方後円墳への変遷を裏付ける画期的な出来事です。平成23年に、邪馬台国期に起源を発することが判明した「纏向（まきむく）古墳」（不完全形前方後円墳）、平成25年2月に立ち入り調査が行われ最古の巨大前方後円墳である「箸墓（はしはか）古墳」と繋がったからです。ちなみに箸墓古墳は、一説には卑弥呼の墓と目される注目の史跡です。



### この世からあの世へ

瀬田遺跡の円形周溝は、溝の外側が生の世界、内側が死の世界を意味し、さしずめ陸橋部はこの世からあの世へ続く道です。ここでの円の持つ意味は、生と死の隔たりです。陸橋部が、外側に押し出された形で発展していったのが、前方後円墳ではないかと推定されます。その際、溝の途切れ（陸橋部）は消滅し、堀が墓を完全に囲むように「この世」と「あの世」が完全に遮断されています。

### 前方後円墳の形成過程（推定）



瀬田遺跡 纏向石塚古墳 箸墓古墳

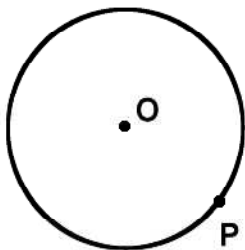
(朝日新聞デジタルの記事に基づいた自作図)

## 円の完全性とは

では、道長が「望月の 欠けたることも なしと思へば」と詠った「円の完全性」、古墳における生と死を分け隔てる「円の境界性」は何に由来するのでしょうか。ここからは算数(数学)の見地から述べることにします。

円の定義は、「平面上の定点  $O$  からの距離 が等しい点  $P$  の集合でできる曲線」で、その性質は、「線対称、点対称、曲線のみで構成(角がない)、優しい、円満」等があげられます。円が多々ある図形の中で唯一完全無欠なのは、「(定点  $O$  から) 全てに等しい点が構成する点の集合体」に他ならないからです。円は言わば「神の図形」で、人がその栄華や権力を誇示する時、円の完全性に行き着くのも道理として頷けます。

しかし人は完全無欠な神仏とは違って、全てに等しく優しくはなれません。されど。人は人としての不完全さや限界をわきまえつつ、美しさや優しさ(人間性)をもって生きたいものです。図形から、円から学び得ることは、歴史文化を通し人の生き方にも及びます。子どもたちには、「人として、自分をどう形作っていくかが大事!」と説く次第です。



円がなぜ美しいか やさしいか 完全なのか

定点  $O$  からの距離 が等しい点  $P$  の集合体

↓

全てに等しい点が構成する線

だからこそ 美しく やさしく 完全(平等均一)

線対称の軸も 回転対称の角度も 無数無限

正三角形も正方形も及ばない **円だけが完全無欠 神の図形**

<参考資料>

Wikipedia「前方後円墳」「纏向遺跡」「箸墓古墳」

朝日新聞デジタル「前方後円墳のルーツ発見か 奈良で弥生末期の円形墓」